

笹川保健財団 地域啓発活動助成

助成番号：2022－005

2023年2月28日

公益財団法人 笹川保健財団

会長 喜多悦子 殿

2022 年度笹川保健財団地域啓発活動助成 活 動 報 告 書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

患者の望む暮らしの実現に向けた訪問看護職、保健所看護職、大学病院看護職との
看護連携セミナーの開催

所属機関・職名 旭川医科大学 看護職キャリア支援センター地域看護職支援部門 部門長

氏名 井戸川 みどり

1. 活動の内容・実施経過

1) 活動の背景と目的

旭川医科大学看護職キャリア支援センター（以下センターとする）は、医学部看護学科と病院看護部が連携・協働のもと、専門職業人としての看護職者のキャリア開発や生涯学習を支援し、看護の質の向上を図ることを目的として、2019 年 3 月に設立した。センターは、「教育プログラム開発部門」、「キャリア支援部門」、「人事交流部門」、「地域看護職支援部門」の 4 つの部門から組織される。

地域看護職支援部門では、2020 年に地域包括システムの推進において病院と地域の看護職が連携し、人々がその人らしく地域で過ごせるよう、訪問看護事業所及び訪問看護職を対象に本学との連携に関するニーズ調査を実施した。その結果、訪問看護職は、「1 人で判断しケアする時」、「病状の変化や今後を予測したケアをする時」に困難感を感じていること、また、本学との連携に関しては、「専門性の高い看護職の助言やケアへの介入」、「困難事例の相談」、「学習会」、「事例検討会」などの要望が高かった（調査結果はセンターホームページを参照）。この結果を踏まえ、当部門では、2021 年から ICT を活用し、本学と地域の看護職が知識・技術をシェアした双方の看護実践力の向上を目的とした事例検討会を開始した。

2022 年は、その人らしい地域での療養生活の支援と交流の機会の定着を目的に 3 回のセミナーを開催した。さらに行政との連携をはかるため保健所看護職にも参加を呼び掛けた。

2) 活動の方法

対象：本学看護職員、道北・道東地域の訪問看護職、保健所看護職

方法：本学遠隔医療センターの協力を得てオンラインシステムを活用し、3 回のセミナーを実施する。3 回のセミナーのテーマは、2020 年の調査結果で要望が多かった認知症高齢者の在宅移行、参加者から事例提供があった医療依存度が高い高齢者の在宅移行、高齢者の外来化学療法継続に向けた支援とし、グループワークまたは事例検討を行う。学外の看護職は、オンライン参加、学内参加者は、1 グループ 3 ～ 4 名とし、グループごとに遠隔医療センター内のオンライン通信が可能な部屋に集合しオンラインで参加する。グループワーク・事例検討会は、学内・学外参加者を合わせブレイクアウトルームを活用し、3 ～ 4 グループとし、グループに 1 名のファシリテーターを配置する。事例検討会の事例の概要と検討テーマについては、予め参加者に配布する。セミナー終了後と 3 か月後にアンケートを行う。学外参加者は Google フォーム、学内参加者は紙面にて実施し、セミナーの効果について評価する。

内容：セミナーの目的、進行に関するオリエンテーション 10 分

テーマに関する領域の専門看護師、認定看護師、訪問看護師いずれかによるミニレクチャー 15 分間

事例の説明 5 分間

テーマに沿った意見交換または事例検討会を 30 分間

全体会で意見交換、事例検討の結果を 10 分間で共有

ミニレクチャー講師からの総括などまとめの時間 5 分間

セミナー開催スケジュールとテーマ（開催時間はいずれも 17:45～19:00）

日程	テーマ	内容
第1回 7/7	医療依存度の高い患者の在宅移行に向けて	ミニレクチャー 希望する生活の実現に向けた準備 ～退院支援事例を振り返って～ 講師：本学地域医療連携室看護師 グループワークテーマ 医療依存度が高く、介護力に不安がある場合の在宅移行に向けて
第2回 9/22	認知症を抱える患者の在宅移行に向けて	ミニレクチャー 認知症の人がよりよい生活を継続するために －認知症ケアにおけるACP－ 講師 本学老人看護専門看護師 事例検討会 テーマ 重症度の高い認知症患者の在宅移行に向けて
第3回 12/9	地域で暮らす高齢者の安全・安楽な外来化学療法の継続に向けて	ミニレクチャー 看看がつながれば、外来も生活の一部となる 講師 訪問看護ステーション所長 事例検討会 テーマ 高齢者が外来化学療法を継続していくために 必要な看護の視点と情報共有について

※ 第2回セミナーより、公益財団法人 笹川保健財団 2022 年度地域啓発活動助成を受けた。

2. 活動の成果

1) セミナーの参加状況

	学内参加 人数	学外参加 人数	訪問看護 事業所数	保健所	学外参加者の地域
第1回	14名	15名	8	1	旭川市、上富良野町、富良野市、 中標津町、芽室町
第2回	15名	16名	9	1	旭川市、富良野市、留萌市、網走 市、遠軽町、芽室町、音更町、中標 津町、紋別市、
第3回	9名	13名	5	1	旭川市、富良野市、網走市、留萌 市、芽室町、
合計	38名	44名	22	3	

2) セミナー終了直後のアンケート結果

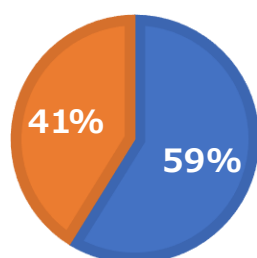
アンケート回収数 68 名、回収率 82.9%

(1) 参加者の背景

	年齢	看護職経験年数	訪問看護職経験年数
学内	36 歳	14 年	
学外	47 歳	23 年	13 年
平均	42 歳	17 年	

(2) 参加動機に合っていたか、合わなかったかその理由

参加動機に合っていたか

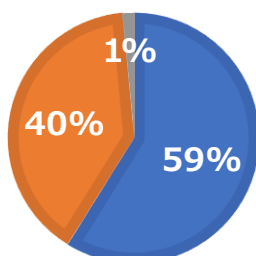


■ 合っていた ■ おおむね合っていた

- ・急性期病院、訪問看護双方の視点を学べた
- ・連携の困難さを感じていたが、病院と在宅で検討することが利用者の安心につながると学んだ
- ・相互理解につながった
- ・事例検討の対象者と似たケースが増加していた
- ・ACP について学びたかったので、知識を得られた
- ・在宅での介入やサービスの状況を知ることができた
- ・高齢者の外来化学療法の現状を伝えたいなど

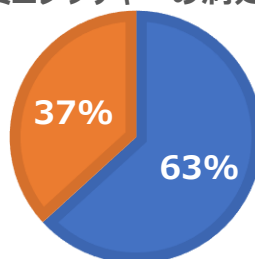
(3) 満足度

セミナー全体の満足度



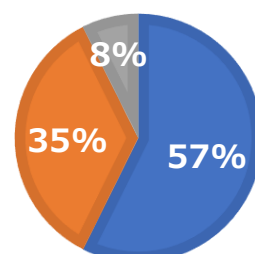
■ 満足 ■ おおむね満足 ■ やや不満

ミニレクチャーの満足度



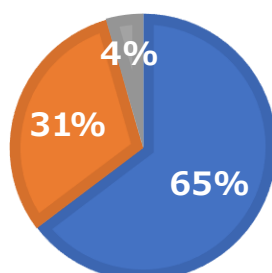
■ 満足 ■ おおむね満足

グループワーク・事例検討会



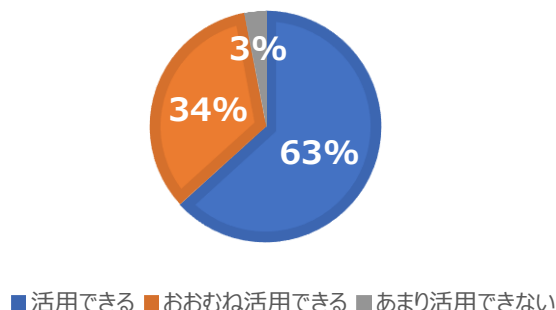
■ 満足 ■ おおむね満足 ■ やや不満

(4) 新たな学びや知見を得ることができたか



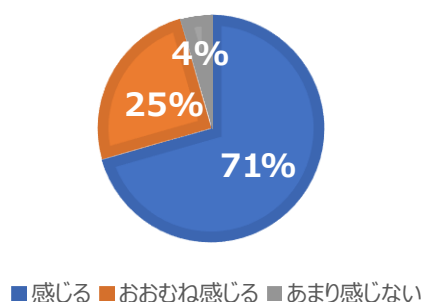
■ できた ■ おおむねできた ■ あまりできなかった

(5) 業務や看護実践に活用できるか、できないかその理由



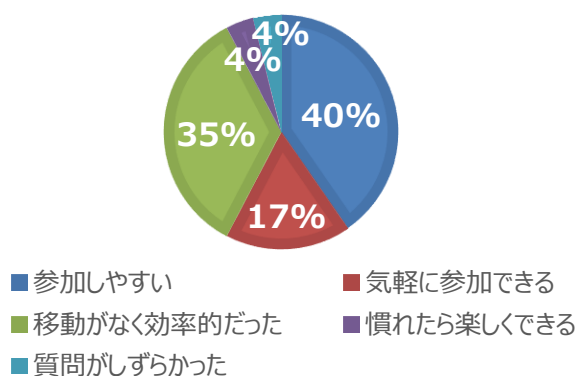
- ・病院看護師として患者・家族の受け止めや目標について、入院時から積極的に関わる
- ・訪問看護師として、在宅での様子を情報発信していくことが相互理解につながる
- ・他の事業所の苦勞がわかり勇気が出た
- ・意思決定に必要な要素や人生会議、多職種カンファレンス、在宅との話し合いのタイミングを学んだ
- ・支援する人が早期に連携するのを感じたなど

(6) 訪問看護事業所と大学病院の看護がつながるきっかけになると感じるか



- ・顔と顔を合わせ立場が違う人の意見が聞けた
- ・在宅支援が必要な患者の相談がしやすくなった
- ・情報交換ツール、つながりがあるといい
- ・距離があってもオンラインでのつながりができた
- ・市内の病院、介護施設の看護職員などとのつながりの必要性を感じた
- ・イメージできなかった外来や化学療法の事例を知ることができた など

(7) Zoom 形式について（複数回答可）



(8) セミナーへの意見・感想

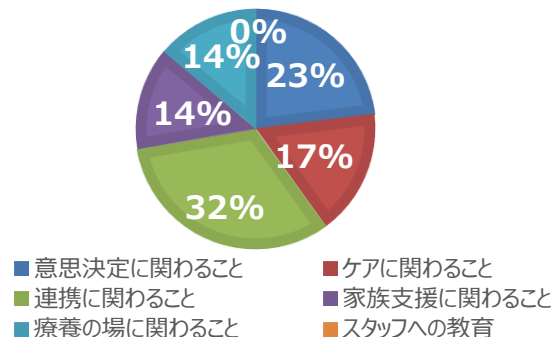
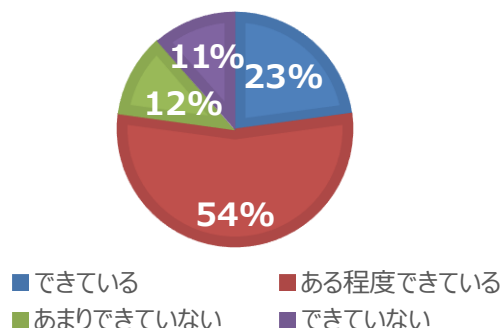
- ・事例検討は、盛り上がり時間が足りなかった。他の事例も検討したい。
- ・事例から具体的な連携やコロナ禍での連携などについても意見交換したかった
- ・月1回程度で病院と在宅がつながる会があるといい
- ・病院、訪問看護、他事業所、他部署など様々な生の意見が聞ける良い機会になった など

3) セミナー終了3か月後アンケート結果（第1回、第2回の集計結果）

アンケート回収数 第1回 18名 62.1%、第2回 17名 56.7%

(1) セミナーで得た学びや知識の活用状況

(2) 活用の場面（複数回答可）



(3) 活用できていない理由

活用する場面、症例がなかった 8名

4) セミナーの成果

参加者は、専門性の高い看護師のミニレクチャーでは求めている知識や実践での疑問を解決するヒントを得ていた。また、グループワークと事例検討では、多角的視点から在宅移行に向けた患者・家族の意思や希望の確認と情報共有の必要性、早期の訪問看護への相談と関わり、自己や部署の退院支援や連携について振り返る機会となった。さらに、意見交換の中からお互いの看護実践、大切にしている思い、看護観を知る機会となった。コロナ禍では、顔を合わせ、直接話し合う機会がこれまで以上に減少した。患者の情報共有、連携とともに大学病院の看護、訪問看護がお互いを理解し連携することが、地域でのその人らしい生活の実現により近づくと考え。

ICTでのセミナー形式は、遠方の地域からの参加も可能であり、近郊においても移動の負担がなく参加しやすい方法と考える。また、3か月後アンケートでは7割強の参加者がセミナーでの学びを実践で活用していた。大学病院には遠方の地域へ退院する患者も多く、退院先の訪問看護ステーションと連絡を取り合うことが必要となる。今後もICTを活用したセミナーを継続し、知識のシェアとともに顔が見える関係やつながるきっかけになることを期待する。

3. 今後の課題

今後の課題は、セミナーの参加対象を地域の多様な場で活動する看護職に拡大することである。大学病院では、自宅に退院する患者だけでなく、介護施設への入所や転院し在宅に移行する患者も多い。本学と地域の病院や介護施設、さらに訪問看護ステーション、保健所の看護職などがつながることで、より切れ目のない看護の提供ができ、その人が望む暮らしの実現と地域全体の看護実践力の向上につながると考える。

4. 活動成果等の公表予定（学会、雑誌）

2023年度のセミナー実施結果を含め、3年間の評価を学会発表する予定。